

参考資料①：プロジェクトの狙い

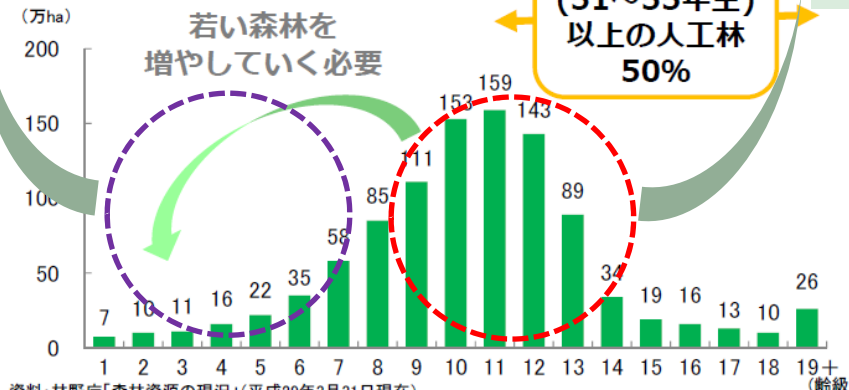


木材価格低迷や植林コスト高で再造林進まず。



植林コストの低減により再造林を促進し、偏っている齡級を平準化。さらに短伐期施業により、継続した国産材の安定供給。

人工林の齡級別面積




戦後の拡大造林を経て森林資源は蓄積。伐採のタイミング。

資料：林野庁「森林資源の現況」(平成29年3月31日現在)
 注1：齡級(人工林)は、林齡を5年の幅でくった単位。苗木を植栽した年を1年生として、1~5年生を「1齡級」と数える。
 注2：森林法第5条及び第7条2に基づく森林計画の対象となる森林の面積。

(出所：上：金庫作成、下：林野庁)

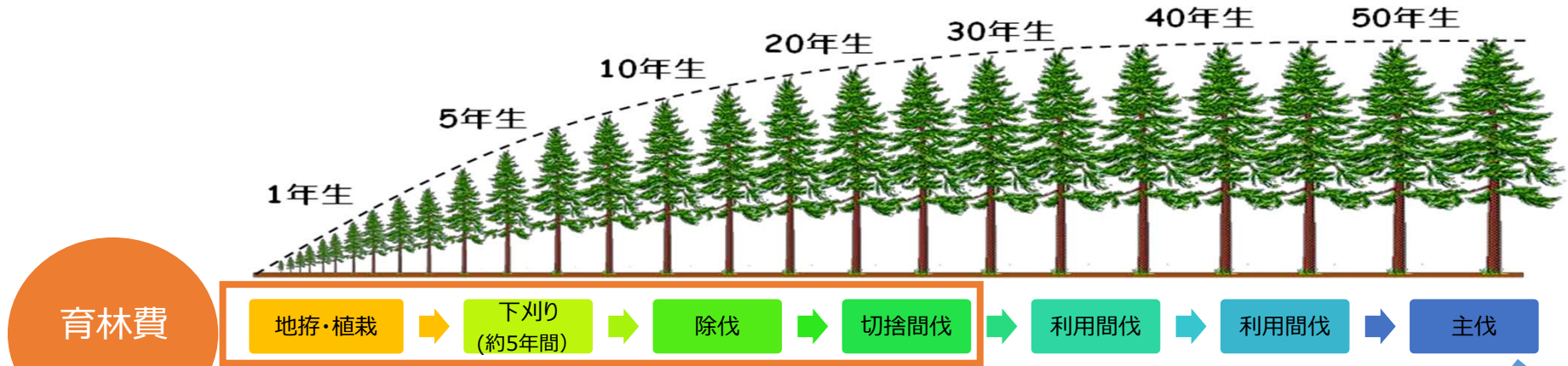
- 山元における森林・林業経営を循環させ、森林の多面的機能を発揮。

参考資料②：プロジェクトのポイント

ポイント	内容	(参考) イメージ
①早生樹の活用	<p>・「早く」「成長する」「樹種」の総称で、スギやヒノキに比べて成長量が大きな樹種（コウヨウザン）を活用することで、伐期の短縮（50年→30年）に繋げる。</p>	 <p>コウヨウザン（出所：一般財団法人広島県森林整備・農業振興財団）</p>
②コンテナ大苗による一体作業	<p>・コンテナ大苗（育苗用の培土を入れた専用の容器で生産された土付きの大苗）を活用することで、伐採・造林の一体作業による地拵えの省略や、下刈り回数の削減に繋げる。</p>	 <p>コウヨウザンのコンテナ大苗（出所：一般財団法人広島県森林整備・農業振興財団）</p>
③植林の疎植	<p>・従来、約3,000本/haの植林が一般的なところ、1,500本/haに植栽本数を絞ることで、短伐期で間伐作業を必要としない施業に繋げる。</p>	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid gray; padding: 10px; text-align: center; width: 150px;"> <p>従来 3,000本/ha (本数多)</p> </div> <div style="margin: 0 20px; font-size: 2em;">➔</div> <div style="border: 1px solid gray; padding: 10px; text-align: center; width: 150px;"> <p>今回 1,500本/ha (本数少)</p> </div> </div>

参考資料③：プロジェクトの効果

<従来型の造林～主伐イメージ（スギを想定）>



<低コスト再造林プロジェクトで目指す姿>

